

題字は斎藤怜奈さん(会津若松市・一箕中3年)

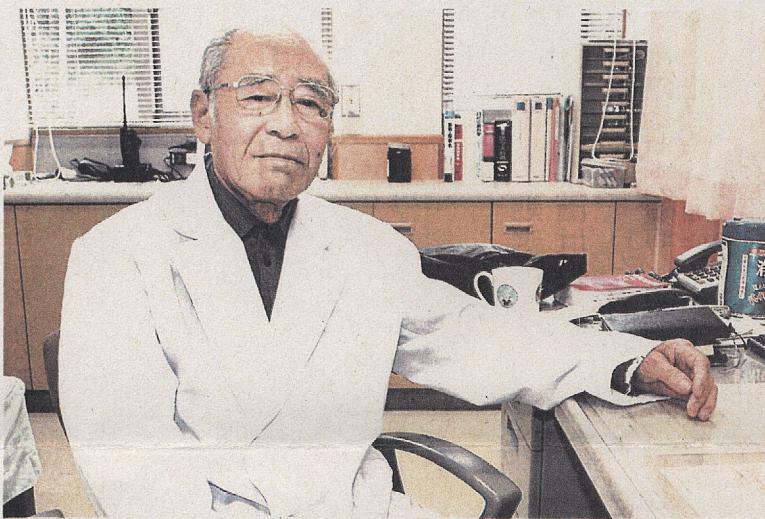
2014

今を生きる

東京から鮫川に移住
医師 佐藤 蕃さん

85歳 最前線貫く

生涯現役が私の信念です。東白川郡医師会に今月、八十五歳の医師、佐藤蕃(しげる)さんが入会した。東京都から鮫川村に移り住み、四月一日から週三日、村国民健康保険診療所に勤務している。離島の診療や都会の夜間往診に豊かな経験を持つ。県医師会によると、平成二十三年二月末で会員数は二千六百五十人だったが、今年五月末では二千五百四十三人まで減った。医師不足が続く県内に身を投じ、地域医療の最前線を走り続ける。



「高齢でも力に」村診療所勤務

内科専門で勤務医一筋だ。東京医科大を卒業してから、総合病院や診療所などで勤務した。前職は都内で人間ドックや健診を専門としたクリニックの所長。今年一月にクリニックが閉所した。医療現場にこだわり、また新たなステージを求めて。

「高齢の私でも何か力になれるはずだ」。東日本大震災で甚大な被害を受けた福島、宮城、岩手の被災三県の深刻な医師不足が頭に浮かんだ。自らそれぞれの県庁に電話をかけ情報を集めた。鮫川村が平成二十六年四月から、村内に常駐できる医師を探していた。原子力災害が重なり、過疎や高齢化が進む村に自が留まつた。

昭和四十年、都内から南に約三百キロ離れた八丈島に渡り、島の診療所で一年二ヶ月を過ごした。四十二年から五十年までは屋間の病院勤務の傍ら、港区西麻布の自宅で夜間診療を受け付けた。村でやり遂げられる自信があった。「住民の目線に立ち、患者と心を通わせたい」と志す医療を口にしている。現在は別の男性医師と交代制で月、火、土曜日を担当する。多い時では一日二十人ほどを診る。「逆に、皆さんから元気をもらつてもらっています」。現役を貫く「鉄人」の表情が自然と和らいだ。

「住民と心を通わせたい」と話す佐藤さん